小林多喜二と「小樽新聞」

―河上肇「唯物史観に関する自己清算」とストリンドベリ『結婚生活』―

尾西康充

1　有島武郎と「小樽新聞」

一九二二年七月一八日有島武郎は胆振国虻田郡狩太（ニセコ町）に所有していた農場四四七町三反二畝三五歩を小作人七〇戸に無償譲渡した。彌照神社で小作人を集めて農場開放を宣言した翌一九日、札幌の時計台演舞場に赴き、「アイヌ教化団講演会」が主催する講演会の講師を務めた。約六〇〇名の聴衆を前におこなった約一時間半の講演の大要は、「独り行く者（ローファーと主義者との争闘）」として「小樽新聞」（一九二二年七月二一、二二日）に掲載された。同日の日記には「此収入はアイヌ保護の資金に編入されるとの事だ」とあるのだが、小作人のために農場開放を勇断する一方で、アイヌ民族の同化政策に協力していたというのは、北海道をめぐる当時の地政学的意味を再考する格好の材料を提供するものである。有島によれば、「現在の有様では満足しないで或理想と其実行に対して全力を尽して終らうとする人」は「建設的傾向」を持つ「主義の人」と呼ばれる。「如何なる迫害に会うても其主義を貫徹して」ゆこうとし「生活の制度を造り其主義をして永遠に確立しようと努力する」。しかし「永久に之を守らんとし守らしめんとする為に権力が発生」することになって、皮肉にも「被迫害者が一変して迫害者の立場となる故に之に与しない人々に取つては呪ひのワナとなる」。他方「絶対的自由者」は「破壊的傾向」を持つ「ローファー」――「懶怠者流浪者」――と呼ばれる。ホイットマンのように「或理想が其目的に達して居た時には其処を既に過ぎ去つて居た。即ち最後に打立てる立場がない。それからそれへと高遠な彼方へ追うて行く」ために「如何なる社会からでも何処までも迫害を蒙る。若し外界の迫害がないとしても彼は彼れ自身を迫害」する。有島は「基督を売つた猶太人の如くさすらふ」運命におかれながらも「彼自身の衷心の要求に向つて忠実なる歩みを続ける」という「ローファー」の生き方に共感している。ここには四五歳の人生最後にたどり着いた有島の思想的境地が示されている。

「小樽新聞」には、七月一九日付岩内支局の「『生れ出づる悩み』の主人公／赤切符でお澄しの有島さん／岩内の講演も大当りで森本／博士の許へ農場の相談に行く」という見出しで農場開放が報じられていた。「赤切符」とは三等乗車券のことを指し、それまで「白（黄）切符」の一等車に乗っていた有島の立場が急変したことを切符の色の

変化を使って象徴的に示し、『生れ出づる悩み』の主人公のモデル木田金次郎とともに岩内郡にある函館本線小沢駅から乗車したことを伝えている。同紙本文には「これから真の文筆の人となつて境涯を送らうと云ふ背広服の軽い姿の文士有島武郎氏がいかにもプロレタリヤの親方らしく『生まれ出づる悩み』のヒーロー木田金次郎さんとたつた二人で小沢駅ホームからひよつこり赤切符で乗つた」とあって、有島が「プロレタリヤの親方」であるとされていた。経済的な苦境におちいっていた小作人たちを救い出そうとはしたが、有島本人は何かの思想原理にもとづいて生きる「主義者」ではなく、自由放埒に行動する「ローファー」であることを自任していたのである。

農場開放から自殺へと至る最晩年の有島の心境を知る手がかりとなる講演録「人間は誇大する動物である」と感想「狩太農場の解放」もまた「小樽新聞」に発表されていた。一九二二年八月五日に掲載された「人間は誇大する動物である」の冒頭には「小樽啓明会主催の有島氏歓迎茶話会が七月廿日夜市内色内町精養軒階上で開かれた。各方面からの男女の出席者約五十名程度の席上、氏は寛いだ態度で一場の講演を試み、それからホイットマンの詩「リンカーン追頌歌」中の「死の歌」「群衆――その海原のさかまく波間から」及び「揺りやまぬ揺籃から」の三篇の朗読があつた」とある。啓明会とは、早川三代治や高田紅果らによって一九一九年に結成された社会主義思想にもとづく文化団体で、啓明会メンバーを母体にした美術家グループ緑人会には、有島や木田も参加していた。「人間は誇大する動物である」は、さきに引用した札幌の時計台演舞場での講演会の翌日に開催された講演会の大要であった。このなかで有島は「人間唯一の道徳は自然に対しては其絶大の誇大をなし創造をなすこと、又既に誇大されたる物象に対しては容赦なき批評を行ふこと是れである」とし、「創造的芸術的能力」と「批評的科学的精神」の相補的発展が必要であることを主張した。その主張は「近世芸術の勃興は文芸復興期――引ては羅馬風の芸術家の個性と自然とを無視した模倣芸術に対する独創的ゴシック芸術の反抗」であったことを称揚する有島の芸術観に通底するものであった（「叛逆者」、「白樺」第一巻第八号、一九一〇年一一月）。

他方一九二三年五月二〇、二一日に掲載された「狩太農場の解放」は、「我社創立三十年を記念して諸名士の感想」という総テーマにもとづく連載一二〇回のうち有島が担当した二回分である。「私が胆振国狩太農場四百数十町歩を小作人の為に解放して数ケ月になりますが」という言葉ではじめられ、「今度の土地解放なるものが毫も小作人の現在組織の行詰まりより来る痛切なる自覚せる欲求に基いて手放され獲得したる結果でなく、温情的に与へられたる土地であるのだから、彼等旧小作人は其の土地解放の精神を忠実に実行して漸次其の範囲を拡大して行く如き事は迚も難い様に思はれる」と懐疑し、「共産的の精神と教養は遺憾ながら誠に小作人の間には薄く却て都会に於けるよりも資本主義的精神は地方農村に於て溌溂たるの事実に徴する時私は狩太農場の前途を略推測することが出来るものと思ふ」という悲観的な見方を示す。

この記事が掲載されてから約二〇日後の六月九日未明、軽井沢の別荘浄月庵で婦人公論記者波多野秋子とともに縊死したことを考えれ

ば、「労農露西亜に於ける共産的制度も無知無覚の農民を基礎としては如何に政府の大なる専制力を以てしても円滑に行はれないのであるに鑑みても明白であらうと思ふ」というように、かつて思い描いていたのとは懸け離れた小作人の現実に期待を裏切られた有島がどれほど絶望を深めていたのかが分かる。絶望の淵に落ち込んだ有島が当初抱いていた社会改革の理想を引き継いだといえるのが、そのとき小樽高等商業学校三年生であった小林多喜二であった。「小樽新聞」と多喜二とのかかわりに触れながら、社会改革を目指した多喜二の思想的成長の軌跡を明らかにしてみよう。

2　小林多喜二と「小樽新聞」

札幌の「北海民燈」を前身として一八九四年一二月に創刊された「小樽新聞」は、「北海タイムス」と並ぶ道内有数の新聞で、本社ビルは小樽区港町（堺町）に建てられていた。小樽高商校長渡辺竜聖は「殊に吾輩を驚かせるは来道の当初本道の予想外なる発達と同時に新聞紙の著しく進歩し居たる事で北海タイムスや小樽新聞の如き京阪を除ける地方新聞中他に類例なき大新聞の存在し而も紙面の記事が他の地方新聞に比べて独創的なるは多とすべき点である」と述べていた（「北海タイムス」、一九一六年一〇月三〇日）。多喜二が「田口生」というペンネームで「小樽新聞」に論説を投稿するのは、北海道拓殖銀行に務めて三年目に当たる一九二六年の「シェクスピアよりも先ずマルクスを」（一一月一七日）、「朝野十二氏へ」（十一月二七日）、「頭脳の相違」（一二月四日）からであった。「シェクスピアよりも先ずマルクスを」では、「本書は解説書としては相当専門的に調子を上げたつもりであるが、著者の最も心血を注いだ点は寧ろ、如何にして一般読者に肩のコリを与へずして彼等の知識水準を此調子まで引上げるかといふことであつた」という「序」のある高畠素之『マルクス十二講』（一九二六年三月、新潮社）を読んで、多喜二は「自分がマルクスの本質の明確な画劃を知った――知り得た最良のもの」だとし「マルクスは専門の研究ではなく現代社会人の常識でなければならない。其の意味で此の位の本は一寸外にあるまいを信ずる」とする。そのうえで「自分は敢て斯う云える――シェクスピア、ゲェテを読む先に先ずマルクスを読んだ方がいゝ」と結論するのであった。

これに対して小樽新聞社記者であった米山可津美が「朝野十二」というペンネームを使って、マルクスとシェクスピアとは本来別物で、科学と文学とは区別して論じるべきだと「小樽新聞」で反論すると、多喜二は「朝野十二氏へ」と「頭脳の相違」を発表し、「一体誰れに断ってマルクスを科学者だと云うのか、此んな人はベエトウベンの「第九交響楽」の最後で肉声を入れた事を批難して得意然とする仲間だろう」と息巻いたのであった。

翌二七年、多喜二は「小樽新聞」に「大熊信行先生の「社会思想家としてのラスキンとモリス」」（二月二七日）、「十三の南京玉――あぐらをかいての話――」（五月二三、三〇日）を投稿している。『社会思想家としてのラスキンとモリス』（一九二七年二月、新潮社）の著者大熊信行は、多喜二にとって小樽高商の恩師で、研究室に「レン

ブラントやゴッホ、セザンヌの原色版の画」が掛かっていたことなどを思い出しながら「経済学者としての先生が学校の講座であの経済価値論を講義するに当り示された遠大な抱負と情熱を忘れることは出来ない」という。同二七年の三月一四日午後六時、磯野農場小作争議に関する糾弾演説会が本願寺説教所で開催されるが、「満員で入れず、表には武装した巡査が何十人も立って居り、入れないでいる人々が何百人も立ち去りもしないで表にいる」光景を目撃する（田口タキ宛一九二七年三月一五日書簡）。小樽の労働者と富良野の農民とが連携した争議団の演説会に小樽警察署は「正私服百名余の警察官」を動員して「出演の争議団員及び応援の労働組合員の言論を不当に中止し、更に殴る蹴る打つ、牛馬の如くに会場から引きずり出して検束し、「言論の自由」を完全に蹂躙するの陰謀を犯した」[1]（「人権の迫害其極に達した小樽官憲の陰謀」、労働農民党小樽支部作成、一九二七年三月一八日）とされる。

これらの光景を目撃した後に執筆された「十三の南京玉」には、（葉山嘉樹の作品に触れながら）「あの「淫売婦」や「セメント樽」によって無産階級意識を（頭からではなしに）胸から把握した人達が素晴らしく多いのを知って、そうかと思った。――だが、これは重大な問題を呈示している」とある。田口タキに宛てた一九二七年五月書簡によれば、この「重大な問題」とは「芸術というのはたゞ単に、人間にいゝ気持だけを与えるものでなくて、人間の行動に絶大な刺戟を与えるものであるということを明かにした」ことを指していたことが分かる。五月二〇日小樽区花園尋常高等小学校で開催された小樽新聞社後援の文芸講演会は、芥川龍之介「描けていること」と里見弴「永遠の偶像」に一五〇〇名の聴衆が押し寄せた。講演会終了後、多喜二は伊藤整の他に同人誌「クラルテ」「北方文芸」のメンバーたちと一緒に、芥川と里見を料理屋新中島に招いて座談会を開いたのだが、残念ながら「里見弴氏は印象が愉快だった。停車場へ見送った。文壇の両大家を眼のあたりに見ることを得たのは、うれしかった」（五月二二日日記）とあるだけで、芥川に関する感想は特段記されていない。ちなみに芥川は約二カ月後の七月二四日に自殺しているが、多喜二は八月二五日日記に「芥川龍之介が七月二十四日？　に自殺した」とあり、「芥川の著作を四、五読んでみた。文章のスタイルは独特かも知らないが、説明的であるのに参った」とだけ認めている。

同二七年六月五日乗用艀合資会社従業員が待遇改善の要求をすることからはじまった小樽港湾労働争議に、多喜二はビラ製作などの応援をおこなったとされ、八月労農芸術家連盟小樽支部に加わって、小樽合同労働組合や労働農民党のなかでは支持団体の分裂があったものの、日本プロレタリア芸術連盟の加藤美樹夫と一緒に「文芸戦線」読書会を開催し、労芸とプロ芸との合同研究会「左翼文芸研究会」を発足させる。さらに組合や党組織とのかかわりを深め、九月古川友一の主宰する社会主義「研究会（火曜会）」や河上肇「マルクス資本論略解」研究会に出席するようになった。古川は労働農民党党員で、多喜二の「一九二八年三月十五日」（「戦旗」第一巻第七、八号、一九二八年一一、一二月号）の「龍吉」のモデルになった人物であった。河上の「マルクス資本論略解」は一九二三年五月三〇日から翌二四年六

月二〇日まで「社会問題研究」に一九回にわたって連載された後（四五～五六、五八、六〇、六一、六五～六七、七二冊）、『マルクス資本論略解』第一巻第三分冊として一九二五年一月に弘文堂書店から出版された。河上によれば「この第一巻第三分冊を標準として、その前後を統一することにより、資本論の全三巻に通ずる略解を完成する予定である。しかし果して何時、如何なる形にこの予定を実現し得るかは、恐らく私自身の意識外に横たはる事項であらう」とし、結局『マルクス資本論略解』は完成するには至らなかった。

多喜二は同二七年二月七日日記に「マルクスの「資本論」でも読んでみたい気がしている。が、それの根本的な処に疑いをもっている自分は、結局、社会主義的情熱を永久に持てぬ人間のように思われる」と書いていたにもかかわらず、三月二日日記には「マルクスの「資本論」を読み出している。そのデリケートな、科学的頭脳にはホド〳〵感心してしまった。カール・カウツキーのものや、河上肇、高畠素之氏のものなどをそばに置いて、やってゆく積りだ」と急転し、マルクス主義思想に取り組みはじめた。つぎに、同時代のマルクス主義思想家河上から多喜二がどのような影響を受けたのかを検討してみよう。

3　河上肇の「自己清算」

多喜二は一九二七年四月一〇日日記に、福本和夫の論文「社会の構成並びに変革の過程」は「読了」、「全部唯物弁証法的に述べられている。非常に感激した最初の本」とし、「経済学批判の方法論」は「全部読んでいない」と認める一方、「河上肇。「社会問題研究」（唯物史観の自己清算）平明で、いゝ。（福本につかれて、自己清算を一生懸命やっている。）／唯物論的弁証法の核心を捕えようと思う」という感想を記している。一九二五年一一月福本和夫が京都大学学友会主催の社会進化論講座に招かれて、三日間連続講演をおこなって以来、いわゆる福本イズムに感化された京大の左翼学生の間で河上批判が急速に高まっていた。二六年三月福本が「河上博士最近の発展――「マルクスの謂ゆる社会的意識形態について」に答ふ」（「マルクス主義」第三巻第二号）を発表すると、河上は二七年一月「再びマルクスの社会的意識形態について――かねて福本和夫氏の批評に答ふ」（「経済論叢」第二四巻第一号）で反論した。福本は河上の「唯物史観を哲学ぬきの経済史観とみる見地」や「唯物史観の根本にWille zum Leben をおいている」ことなどを批判し[1]、唯物史観と自然弁証法をあわせたものが弁証法的唯物論になると考えていた河上に対して、福本は「唯物史観――歴史の所謂唯物弁証法的把握――は、科学的社会主義並にその運動の核心をなすところの世界観歴史観である。それは、その根抵に於いて、唯物論である。――しかし、自然科学的乃至観照的唯物論ではない。――弁証法的唯物論である」として、福本が理解するところのマルクス主義における唯物史観と弁証法的唯物論との関係を説いていたのである[2]。

河上は一九二七年二月から翌二八年一二月までの間、「社会問題研究」に一〇回にわたって「唯物史観に関する自己清算」を連載した（七七～八三、八五、八七、八八冊）。「従来発表せし見解の誤謬を正し、

かねて福本和夫氏の批評に答ふ」というサブタイトルが付された第一～三回では、三木清の現象学的解釈学に近い立場から自己批判をおこない、「つけたり、福本和夫氏の批判の批判」というサブタイトルが付された第四回～七回ではレーニン『唯物論と経験批判論』に依拠しながら福本への反論をおこなったのである。河上によれば「福本和夫氏は最近の日本において最も盛んに「唯物弁証法」または「弁証法的唯物論」なる言葉を使用された。これによつて吾々の注意をマルキシズムの哲学的基礎の上に向けしめたことは、日本におけるマルキシズムの発展に対する氏の劃期的貢献の一つである。だが私の見るところによれば、氏自分はその言ふところの「唯物弁証法」なるものを理解してゐられない。かくて氏は史的唯物論（唯物史観）を理解されざるのみならず、またマルクスの経済理論の根本的特徴をも理解されてゐない」。しかも「福本氏の頭脳の中において、経済学批判（資本家社会の解剖）と唯物史観（過去の社会諸形態に関する史観）とが、殆ど救ふべからざる程度に混同されてゐることは、氏の著作のところ〴〵に諸種なる現象形態を以て現はれてゐる」という。このように河上は「依然として沢山の泥を――小ブルヂョア的、中間派的、経験批判主義的、等々の残屑を――腹に貯めてゐるかも知れない」と断りながらも福本に対して昂然と反論したのであった。

多喜二は一九二七年七月八日日記に「河上肇の「社会問題研究」はいよ〳〵福本和夫との批評にまでなってきた。たゞ、こういうものを読んでいて、自分自身しっかりした考をもっていないので、どっちにも批評的態度が出ないのをつく〴〵考えさせられた」と認めている。

このとき多喜二が読んだのは、「唯物史観に関する自己清算」第一二章「人間（主体）と自然（客体）との統一」、第一三章「マルキシズムにおける唯物史観と経済理論との内的連絡」、第一四章「唯物史観と経済理論との混同――その著しき例としての福本和夫氏」に当たる部分であった（「社会問題研究」第八一冊、七月三日）

多喜二が「唯物史観に関する自己清算」の内容に直接触れたのは、小樽の勝見茂が主宰する詩の同人雑誌「山脈」（一九二七年五月）に発表した「詩の公式――生活、意識、及び表現の三層楼的関係について――」のなかであった。末尾に「一九二七・三・二〇」という書き入れのある「詩の公式」のなかで多喜二が引用したのは、「社会問題研究」七八冊（一九二七年三月一〇日）に掲載された第四章「実践の理論的根拠」のつぎのような一節であった。

「自分は室の中に住んでいればその室に束縛を受けるのである。室の外に出るにも扉に手をかけて開けなければならない。然しそういうことに従って、自分が外へ出ようとする自分の決意には自由がある。その反対にこの室の中に雀でもまぎれ込んだなら逃げようとして勝手に飛び廻る、だから表面上は自由に思うまゝに振舞っているように見えても、実際には盲目的に外物の支配をうけているのであるから、結局不自由である。室内の構造を知尽することにより、出るべき場所から静かに出てゆく人間上にのみ真の自由はある」（河上肇）

巧みな比喩を使った河上の引用に続けて、多喜二は「如何に滅茶苦茶の雀詩人の多いことか。彼等はあのギャップのまわりを飛んで廻って、結局鼻先を砕いて死ぬ自由を持つであろう。が、本当のところ此処へカントの所謂先験の哲学、超経験の問題が論議されなければならないのであるが、自分としてもこの間の問題に就いては未解決なのである。いずれ触れることがあるであろう」とする。河上が触れていたのは、〈自然における必然〉と〈人間における自由〉との相克という西欧哲学の伝統的な命題で、多喜二は経験世界を超越した境位を想定することによってそれを克服しようとしているのだが、河上は「人間が自然を支配するとは、人間が自然の法則に意識的服従をなすことである。人間の自然に対する支配は、ただ服従的支配としてのみ可能である。そこに自然に対する人間の隷属の自然に対する人間の支配への、また自然的必然の人間的自由への、弁証法的転化が存する」ことを説き、「必然を認識せざるものに真の自由はなく、自由なきところに意識的政策の余地はない」としてマルクス主義における理論と実践の弁証法的統一を主張したのであった。

この時点での多喜二のマルクス主義に対する理解は浅いものであったといわざるを得ない。だが同二七年四月一五日日記には「一四日、米山可津味のところで、田中五呂八、高崎徹、新宮、武田、中司鉄也、それに僕が集まり、僕は徹底的なマルキストの立場から、その唯物弁証法により、田中五呂八の「唯心的ブルジョワ意識」新宮の「ブルジョワ芸術論」に対して論戦し、水をもらさぬ弁証法の偉力を発揮した」とある。あたかも河上・福本論争の当人でもあるかのような口調である。この頃の多喜二は、小樽新聞社勤務の米山・田中・高崎たちとともにプロレタリア文芸理論に関する研究会を開いていた。田中五呂八は釧路生まれの「新興川柳」作家であった。さらに六月二日日記には「樽新に二度出た「十三の南京玉」は非常な評判だった。金井などからもワザ〳〵電話でほめて来てくれた。それよりもなお函館から乗富がワザ〳〵手紙をくれて、俺の自己清算を喜んできてくれた。これからます〳〵勉強しなければなるまい」とある。多喜二とは小樽高商の同級生で、「蟹工船」執筆時には停泊中の蟹工船の実地調査に協力することになる安田銀行函館支店勤務の乗富道夫が手紙で喜んでくれたように、多喜二は自分が「自己清算」をおこないつつあることを認めている。すなわち河上が「自由は必然の認識を前提とする。この必然の認識のもとに行はるゝ人間の実践的活動のみが、始めてその意識目的を実現し得るのであり、且つその意識目的の実現のうちに、人間の自由なるものが始めて存在し得るのである」というところの「実際的唯物論者すなはち共産主義者」への自己変革である。

4　ストリンドベリ『結婚生活』

このように多喜二が河上の「自己清算」を手がかりにして自己変革をはじめたのだが、「「マルクスの「資本論」を読み出している」と認められていたのと同じ一九二七年三月二日日記には「ストリンドベルクの「アスラ」を、これで四、五度目か又読み直してみた」とある。「アスラ（*Otur*）」（スェーデン語の「悪運」という意味）は、スト

リンドベリ『結婚生活』第一巻（一八八六年一〇月）に収録された短編の一つで、多喜二の日記で最初に登場するのはこの一四日前の二月一六日日記で、「ストリンドベルグの「結婚生活」の中の「人形の家」を読みかえしてみた」とある。このとき三月六日余市実科高等女学校で開かれる予定になっていた「ノラとモダン・ガールに就いて」の講演会の講師を務める準備をするために、ヘンリック・イプセンの『人形の家』を読みなおし、イプセン作品については「内容の細かい点については、色々云えるが、女が極端に自由を奪われている日本あたりでは、まだ〳〵有意義な作」だと感じ、ストリンドベリの作品については、「一寸反動的なところもないではないが、「現実の」女を見ている点の深さでは、やっぱりイプセン以上だ、という気がする」を感じていた（二月一六日日記）。さらに田口タキ宛書簡（三月）にも「此頃カール・マルクスという近世科学的社会主義者の「資本論」を読んでいる。プロレタリア問題を取扱っている経済学（今までのブルジョワの経済学と全然異なる）だ。それから、ストリンドベルクの「結婚生活」を一日一篇ずつ読んでいる。自分の作をも少しずつやっている」と記している。このとき多喜二が読んでいたのは――理性的進歩的でフェミニストのイプセンにとって同時代のライバルとされた――神経症的反動的な女性嫌悪の戯曲家のストリンドベリ『結婚生活（*Giftas*）』で、当時手にすることができた邦訳書としては一九一四年七月に一橋堂書店から刊行された水上齊訳、同一四年一一月にアカギ叢書第九一巻として赤城正蔵によって刊行された井出説太郎訳、一九二〇年九月に新潮社から刊行された永島直昭訳があったが、多喜二が日記に感想を残している作品名と目次を対照してみれば、多喜二はこれら以外の訳書で読んでいたことが分かる。なお多喜二はこの作家の名前をストリンドベルクと表記しているが、本稿では通用のストリンドベリと表記することにする。

イプセンとは評価は正反対に分かれたものの、ストリンドベリはイプセンとともに一九世紀のスカンジナビア半島においてキリスト教の〈家族〉や〈性道徳〉が持つ偽善に対して非凡な洞察を示し、母国スェーデンに対する辛辣な批判を繰り返していた。保守系新聞に支持された上流階級によって敵視されていた。結婚に関する一二の短編を収録した『結婚生活』第一巻（一八八四年九月）を出版して一週間後、〈神に対する冒瀆〉〈聖句と聖餐に対する愚弄〉とで起訴され、最長二年間の労働奉仕が求刑された。保守系新聞からの支持を受けた上流階級の有力メンバーやスェーデンのソフィア女王を黒幕とする人びとによって検察当局が扇動されたといわれたが、結局裁判は無罪判決が出された。二〇の短編を収録した『同』第二巻（一八八六年一〇月）では少年愛やレズビアンなどの社会的にほとんど理解されることのなかった結婚形態を描き出した。

二月一六日から三月一四日までの多喜二日記には、「アスラ」「恋愛とパン」「必然」「賠償」「軋轢（不和）」「改造の試み」「不自然な淘汰」「自然の障害」「不死鳥」「ロメオとイユリア」「秋」「強制結婚」というタイトルが記されているが、それらはいずれも『結婚生活』に収録された短編小説であった。三月一三日日記には、「「多産」は、結婚が当然もたらす「多産」「禁慾」「生活難」「零落」「人口

過剰」に対する考えなどが表わされている」という感想に続いて、つぎのような引用がある。

「一切の不幸の源は何か。パンの欠乏だ。しかるに今や新しき世界の大きな商家達は穀物の過剰なる供給の重荷のために倒壊している。矛盾の世界だ。だからパンの配分法に欠陥があるにちがいない。」と云っている。そしてマルサス説の誤りに気付いているが、こゝから一歩踏み出ていないところがはがゆい。（マルクスへぬけ出れないところ。）（河上肇「人口問題批判」参照。「或る魂の発展」「理想主義と社会主義」参照。）

ここで強調されているストリンドベリの「科学」不信は、マルクス主義にも向けられている。「理想主義と社会主義」は和辻哲郎訳『或魂の発展』（『ストリントベルク全集』第二巻、一九二四年五月、岩波書店）の第一七章に当たる。和辻哲郎によれば、『或魂の発展（*En själs utvecklingshistoria*）』は「二十四歳より三十八歳までの著者の魂の開展を厳正に分析叙述しようとする試みであつて、そのために思想、感情、欲望などが表面に現はれ、出来事の詳細な描写は一切省かれた」ものの、「むしろ、七十年代及び八十年代の欧羅巴の精神史を、一人の代表者によつて叙述したものと云つてよいであらう」とする（「訳者序」）。主人公ヨハンとして作家自身がモデルになった「理想主義と社会主義」の内容は、『結婚生活』第二巻を刊行したのと同じ一八八六年に当たる状況が描かれ、「初め社会主義に没頭した時には、彼はそこに、社会全体を根から枝まで改造しようとする改革計画を見た」とされる。ヨハンは「労働者のふりをして家族合同館へ出掛けて行き、それをすぐ傍から見」たり、「マルクス、ラサアル、ランゲ、シェッフル及びベエベルを手に取」ってみたりするのだが、「世人は労働者といふ言葉でたゞ工場労働者を意味してゐた、さうしてそれは党派の利害の臭がした」。ヨハンが「疑ひもなく大きい群である労働者の利害のために立たうとはせず、もつと多数な人々のための自由を求め」ようとしたために「注意人物」「保守的」だと批判された。「社会をたゞ一つの階級のためでなく、あらゆる階級のために改造しようと欲した」ことは「労働者の気に入らなかつた」のである。このようにして「到るところに見られる「悲惨貧乏な労働者」なるものが実は偏執固定観念に過ぎぬ」と思いはじめたヨハンは、マルクスを「党派扇動家」であるとし「煽動者として彼は我々の、またあらゆる不満なるものゝ、先導者である」と結論するのであった。農業が盛んなフランスに在住していたヨハンは、マルクスがドイツの都市工場労働者を中心にした急進的な労働組合・労働党活動に重きをおいていることに疑問を抱き、政治的要求よりも農家における経済的要求を優先させるべきだと主張したために、若いマルクス主義者たちからは「農業社会主義者」「保守的社会主義者」と揶揄されたという。

ちなみに多喜二生前の未発表原稿「ユリイ嬢にあらわれたストリンドベルクの思想とその態度」（一九二四年一一月二一日付の阿部次郎宛書簡に同封）では、多喜二は『結婚生活』の「アスラ」に触れて、ストリンドベリが「下層社会と「完全に」（身体と身体の接触に於て）

溶解出来ないところがある」一方、「その根本において「女中の子」である」という「相反した二つの争闘」が『令嬢ユリー（*Fröken Julie*）』（一八八八年）のなかに「正直に懺悔されていると見るべきではないか」と評価しながらも、「ストリンドベルクがマルクス一派の社会主義観を認めないことは「ある魂の発展」の中（「社会主義と理想主義」）ではっきりと示している」と指摘されていた。しかし Reiko Abe Auestad 氏によれば、多喜二もストリンドベリも〈女性の問題〉と階級闘争に関して洞察を深めていたことは共通し、〈性別〉〈階級〉〈文化〉の間で視点が異なっていたとしても、多喜二はストリンドベリが人生の悲惨な現実に対する非凡な観察者で、ストリンドベリの無比なリアリズムが〈思想〉ではなく〈身体〉の次元に徹した観察眼によってもたらされるものであったことを評価していたという。そして「フェミニズムであれコミュニズムであれ、〝身体〟の次元に無自覚であれば、いかなる理想主義の形態も失敗し、多喜二の言葉でいう〝自然〟によって復讐されたという警告は、時代をこえて妥当であり、最も広義における〝人間性〟への非凡な洞察を証明する」とする。[3]

他方、河上の「人口問題批判」は「社会問題研究」第七三冊（一九二六年八月）に掲載された論文で、発売禁止処分を受けた「人口問題批判拾遺」第七四冊（同九月）とあわせて、一九二七年二月に叢文閣から『人口問題批判』として刊行された。河上は「常識から出発してゐる俗学的なマルサスの絶対的人口法則に対立するところの、資本家的社会における相対的人口法則に関するマルクスの所論」に賛同しながら、当時日本国内で人口過剰の対処として議論されていた「武力的領土拡張政策」、「移植民と商工業の発展」、「産児制限」という三方策をいずれも「姑息療法」だとして却下する。河上によれば「過剰人口は、行き詰れる資本主義の一産物である」とされ、「今日資本家階級のポケツトに這入るどえらい利潤は、みな労働者階級の提供する剰余労働の対象化したもの」であることを考えれば、「労働の生産力の発展自体が行き詰つたために問題が起こ」ったのではなく、むしろ「労働の生産力が発展したがために、可変資本は不変資本に対する比において相対的に減少」して「社会総資本の急激なる増加にも拘らず、労働に対する需要はさまで増加しなく」なった結果「人口の一部が資本の需要せざる過剰分」となった。過剰人口が発生した「根本の病源」は「資本主義の機構そのものに内在」しているのだという。

多喜二は『結婚生活』の読後感として「そしてマルサス説の誤りに気付いているが、こゝから一歩踏み出ていないところがはがゆい」と記し、マルクス主義に疑念を抱いていたストリンドベリではなく、「現存の資本主義を前提とし其の基礎上に行はるる一切の姑息療法が、国民をして何時までも「悩みと迷ひ」のうちに彷徨するを余儀なく」させていることを痛切に批判し、「資本主義の機構そのものに内在」する「根本の病源」に対する「根治療法」の必要性を主張した河上に強く共感を示すようになっていったのであった。

5　多喜二の「全体性的」変革

さきに引用した「十三の南京玉」のなかで、多喜二は「此頃になっ

て、ストリンドベルクの経済思想、社会思想及びそれを貫いている方法（メトーデ）が実にたわいもない反動的なものであることが分りかけて来た」とし、「プレハーノフの所謂芸術に於ける「客観的尺度――形式と観念の合致」から見て、自分があれ程崇拝し研究したストリンドベルクの偶像が自分の眼の前でガタ〳〵と崩壊してゆく気がする。――自分はストリンドベルクが使った言葉をそのまゝに「では他の峰に移って行く」時であると思う」と記している。同じような見方は、同二七年四月一〇日日記にも「自分の見る限りでは、ストリンドベルクはブルジョワ思想家である。「「淫売婦」に対しても、「女性」に対しても、「社会的制度」に対しても、全体性的に見ていない。これは興味あることだ」と認めている。これらの言葉の後に「京大学生事件、支那の国民運動と共産党運動、それに対するロシアの関係。朝鮮の共産党の関係……多事！」と続けていることから、「全体性的」という言葉は、国際的な共産主義運動のなかに文学作品をとらえなおそうとしていたことが分かる。

多喜二は一九二六年四月末、小樽区若竹町一八番地の自宅に田口タキを住まわせるものの、一一月一一日タキが精神的経済的自立を求めて家出し、小樽区花園町の小野病院に住み込みで働きはじめる。翌二七年五月一三日夜、かつてタキが勤めていた曖昧屋「YAMAKI」の「Son と、body & heart の間であったこと」をはじめて知った多喜二が激怒する（五月二二日日記）。それから二人は語り合って和解するかに思えたが二八日早朝タキは行方を知らさず小樽を去って室蘭に向かう。多喜二にとって、ストリンドベリの『結婚生活』を読むことは、社会一般の結婚の問題を考えるというよりも、多喜二による〈庇護〉からの自立を目指して独立家計を営んでいたタキとの関係をみつめなおそうとする自分自身にとっても大切なきっかけにもなったにちがいない。しかし磯野農場小作争議や小樽港湾労働争議などの社会運動に関与しながら、社会の根本的な変革を目指すマルクス主義思想へと「自己清算」をはかるプロセスにおいてストリンドベリから離れていったのであった。

注

（1）岩崎允胤「河上肇と唯物史観」（「北海道大学文学部紀要」第一一号、一九六三年二月、四七頁）

（2）福本和夫『唯物史観と中観派史観』（一九二六年三月、希望閣、三頁）

（3）Reiko Abe Auestad'Kobayashi Takiji, Strindberg's Miss Julie, and the Realist View of the "Body"（オックスフォード小林多喜二記念シンポジウム論文集編集委員会編『多喜二の視点から見た身体地域教育』、小樽商科大学出版会、二〇〇九年二月、四二頁）

※小林多喜二の本文は新日本出版社版『小林多喜二全集』に拠った。

（おにし　やすみつ、三重大学人文学部教授）